

京都市帝國大學經濟學部內
東亞經濟研究所

年四回(三月、五月、七月、九月)發行

東亞經濟叢論

第貳卷 第一號

昭和十七年三月

特輯 南方經濟號

南方經濟の基本問題……………	經濟學博士 谷口吉彦
最近佛領印度支那幣制に於ける 二つの改革……………	經濟學博士 松岡孝兒
比島資源價値の進展……………	經濟學士 淺香末起
ビルマの資源と産業と貿易……………	大場 忠
インドの農産資源……………	文學士 岡崎三郎
濠洲經濟事情……………	宮崎 亮
農業投資植民地としての蘭領インド……………	經濟學士 北野健二
印度支那 ^{に於ける} フランスの經濟政策……………	經濟學士 河野健二
日本經濟と南洋貿易……………	經濟學士 松井 清
南方纖維原料の生産について……………	經濟學士 岡部利良
南方ゴム資源と其の對策……………	經濟學博士 谷口吉彦
南方資源論……………	經濟學博士 蜷川虎三
附錄 南方文献目錄	

書肆 有斐閣 發賣

南方纖維原料の生産について

——東亞に於けるその培養領域としての位地を中心として——

岡 部 利 良

一 は し が き

今日の東亞に於ける纖維原料問題は、日滿支一體經濟を中心とする東亞に於いて不足せる纖維原料を、この領域の纖維資源(纖維原料の生産地盤たる自然的基礎)を開發することによつて、確保し自給することにある。日本は、纖維原料についても、他の重要諸原料と同じやうに、『持たざる國』の代表的なものであり、日滿支を一體としても、纖維原料の供給能力は著しく缺如してゐる。ことに、必然的に、今日の戰時經濟を強化し、新東亞建設のための一翼として、不足纖維原料の補給を計ることが不可缺であり、従つて、その培養領域が求められなければならない。そして、この培養領域たるものこそ、今日謂ふところの南方諸地域である。

然るに、これらの南方諸地域は、從來、一部のものを除き、一般には纖維原料の非生産地域である。本來、植民地は原料供給地として規定されるにも拘らず、植民地或ひは半植民地たる南方諸地域の多くは、その植民地的性格の故に、却つて、纖維原料に關してはその生産を阻害され制約されてゐるのである。纖維原料生産の自然的

基礎が興へられてゐる地域に於いても、多くの場合、その積極的な開發は、從來殆んど日程に上されてゐない。南方纖維原料生産に見る、このおき忘れられたやうな未發達こそ、正に、これらの地域に於ける植民的性格の具體的な現はれの一つである。

かくしてまた、そこに於ける纖維原料の生産に關しては、今日、その資源の新たな開發が、當面の重要な課題として興へられてゐるのである。この場合、纖維原料なるものは、一般に、自然的に賦與されてゐる對象を抽出し、生産することによつて得られるのではなく、一定の自然的基礎の上に栽植し、飼育することによつて生産されるものである點に、鑛産原料などと異なる性質を有つてゐることは、一應、注意されねばならないであらう。

纖維原料は、一般的には、衣料用を中心とし、更に家具用、並びに工業用、農業用等に用ひられると共に、また軍需用として重要な役割を有つものである。戰時經濟の下に於いて、軍需用としての纖維原料を確保することの必要は既に自明である。これに對し衣料生産部門は、今日所謂平和産業の名の下に後景におかれ、またこのことは一應不可避的なことではあるが、然しこの部門の意義は過小評價されてはならない。このことは、國民生活に於ける衣料の重要性と共に、また具體的には、現に日本纖維工業の有つ地位・役割が示すところである。大東亞戰爭の進展によつて、衣料生産部門の重要性は一段と強められてゐる。龐大な人口を有つ共榮圈内に於ける衣料自給の必要がそれである。然しこの事實は、單に衣料の自給と言ふ意味に於いてばかりでなく、更に、南方諸地域からの圓滑なる諸原料獲得の前提として重要な役割を有つてゐるのである。これらの點については、多くを述べる必要はないであらう。

1) cf. International Labour Office, The World Textile Industry, Vol. I, 1937, pp. 18—19.

然し同時にまた、大東亞戦争の進展と共に、纖維原料補給の面に於いても、更に新たな展望が與へられてゐる。それは、培養領域に於ける纖維原料基地の擴大に見るところである。即ち、その補給の可能性は擴大され、或ひは現に擴大されつゝある。

このやうな可能性は、然し、當面未だ一應の可能性を示すに止まり、そこで幾何の纖維原料が生産され、またそれを現實に利用しうるに至るや否やは、一般にはなほ今後の問題に屬すると言つてよい。南方諸地域の纖維資源が概して未開拓のまゝである結果、そこに於ける纖維原料の生産については、資源政策に關する具體的な諸問題のうち、少くとも資源調査から始められねばならないのが、恐らく、現實の状態である。勿論、部分的には既に事情が明かにされてゐて、直ちに生産に着手しうるものもあるだらうが、然しなほ未知の分野が多く残されてゐることは否定されない。それ故、南方諸地域に於ける纖維原料生産の問題は、今日なほ、基本的な資源調査を必要とする段階にあると言つてもよいだらう。然しこれらの點を充分明かにすることは、勿論私のよくなしうるところでなく、こゝに意圖するところも、その一應の概観を試みんとするに過ぎない。即ち私がこゝに取扱ふところは、南方諸地域に於ける纖維原料の補給能力を知る手だてとして、その歴史的或ひは現實的な位地及び自然的基礎の如何等を中心に、若干の個別的資料を幾分でも整理し、以つて一應の見取り圖を得んとする以上に出でるものではない。

纖維原料は、棉花、生絲、羊毛、麻、パルプに大別される。これらのうち、日滿支で自給出来るものは、生絲と麻類の一部に過ぎない。南方諸地域を合しても、その他のものは、一部を除き(例へばマニラ麻)、何れも不足を

示してゐる。殊に棉花、羊毛及び麻類に於ける黄麻は、不足纖維原料の代表的なものであり、またパルプ用原料の不足も問題である。そしてこれらの不足纖維原料の一部を、南方諸地域に於いて補給せんとすることこそ、當面の纖維原料對策に於ける一つの重點をなすものである。然しこの場合、南方纖維原料は、單にそれとしてみ見るのではなく、日滿支、更にまた東亞全體との關係に於いて把へられねばならない。それ故、以下に於いては、それらの場合、東亞に於ける一般的な概觀を試みつゝ、個々の南方纖維原料について述べようと思ふ。

二 棉 花

(1) 棉花は、纖維原料のうち最も重要な位地を占めるものである。然るに東亞に於いては、支那を除き、棉花の大量的な生産地は、これを何處にも見出せないのである。その支那も、亞米利加、印度に次ぐ世界第三位の棉産國ではあるが、自國の需要をみたすにほ不足を示してゐる状態である。従つて、東亞に於ける代表的な綿業國たる日本は、従來、その所要原棉の殆んど全部を、共榮圏外に於ける棉産國からの輸入に俟ち、支那も亦そこに依存するところが少くなかつたのである。これらの輸入原棉が全く杜絶した今日、而かも共榮圏内に於いては、老大な人口によつて多量の綿製品が必要とされてゐるのである。棉花の重要性から見ると、それは、正に、不足纖維原料の代表的な存在である。

東亞共榮圏に於ける綿製品の必要量を正確に算定することは勿論困難であるが、一應の概算は求められる。我が紡績聯合會企劃部の調査によれば、日支事變の直前たる昭和十年、十一年當時を基礎とする共榮圏内（こゝに

包含されてゐるのは、日本、滿洲國、支那—廣州灣、澳門、香港を含む—、佛印、泰國、英領馬來、英領ボルネオ、蘭印、比律賓等の地域である)の綿製品消費量は、合計八、八〇三、六七八千方碼、この綿絲換算量五、五〇二千捆、これに對する棉花所要量一九、二五八千擔と推算されてゐる。このうち、日本が約二七%、支那が約五一%、兩者で約八〇%近くを占めてゐる。この外、更に緬甸を加へ、將來、濠太刺利、新西蘭の如きが問題となるとすれば、右の棉花所要量は二〇百萬擔を超えるであらう。これは極めて概算的なものではあるが、棉花の所要量について、

東亞に於ける國別棉花生産高(單位千擔)

地域別	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
朝鮮	四五八	八〇一	七〇一
滿洲國	三一九	三八〇	二八九
支那	一四、四六八	一〇、六五一	八、〇七八
小計	一五、二四五	一一、八三三	九、〇六八
佛印	二二二	二〇〇	未詳
泰國	二二三	三三三	二〇〇
比律賓	八	八	未詳
蘭印	二二	三二	三五
緬甸	三四五	四五三	三三二
小計	四二〇	五四五	三七七
以上合計	一五、六六五	一二、三七七	九、四四五
濠太刺利	三三二	三七七	四七
印度	一八、八五二	一七、三〇三	一五、二五五

南方纖維原料の生産について

(備考) 朝鮮及び滿洲國は日本棉花栽培協會の資料、實棉は繰棉歩合三〇%として繰棉に換算、支那は、中華棉業統計會調査其他、日滿支のうちには此の外、日本内地、臺灣、關東州、南洋群島に於いても少量の棉花が生産されてゐる。佛印以下は International Institute of Agriculture, International Yearbook of Agricultural Statistics, 1939-40, 原表に於ける單位の異なるものは何れも擔に換算、なほ蘭印の分は輸出高。

1) 紡聯企劃部, 東亞共榮圈綿業自給體制の確立, 紡聯月報, 昭和16年12月, pp. 37-39

一應の見當をつける基礎となしうるであらう。

これに對し、共榮圏内に於ける棉花の生産高は、具體的には近年大體前表のやうな状態にあり、右の所要量から見ると可なり不足を示してゐることが知られる。

即ち、支那棉花が大體平常の生産に近い昭和十二年について見れば、朝鮮以下緬甸までを加へて、その合計は約一二百萬擔餘であり、右所要量の大體六割餘をみたす程度である。而かも事變後、支那棉の生産高、特に出廻高は著しく減少し、昭和十五—六棉花年度の出廻高の如きは、僅かに二・七百萬擔程度に過ぎない。日本内地では衣料の消費統制も行はれてゐるとは言へ、今日、原棉が著しい不足を來たしてゐることは、蔽ひえない事實である。

これに對する棉花増産對策としては、日(朝鮮、臺灣)滿支を通ずる増産計畫が既に實施されて居り、それに依れば、昭和二十六年には合計約二三百萬擔近くのもが生産される豫定である。然しながら、この計畫の實現には種々の困難が横つてゐることは現に示されてゐるところであり、近い將來に自給の域に達することは恐らく困難である。而かも棉花の必要は眼前に存在してゐるのである。視野が南方へと擴大される所以である。

(2) 然し、南方諸地域に於ける棉花の生産が——他の纖維原料の場合と同じやうに——現在のところ、極めて低い位地にしかないことは、前掲の表が示してゐる通りである。それは、南方農業に於ける主要農産物の傍に、かろうじて小さな一隅を興へられてゐるに過ぎない。これらの棉花の生産は、一般に零細な土着農民によつて行はれて居り、従つて農耕方法も原生的なそれである。またその生産は、商品生産のためにも行はれてゐるが、場所に

よつては、殆んど自家消費を目的としてゐるに過ぎない。會つては可なり棉作が廣く行はれ、或ひはその栽植企業の試みがなされたところもあるが、外國綿製品の侵入或ひは植民政策に制約されて、結果は、現に見るが如き状態に陥つてゐる。そして、各地に棉作の適地が存在するにも拘らず、米、その他の農作物の發達に對し、棉作のこのやうな遅れこそ、多くは、これらの地域に於ける植民地的性格の反映であり、また南方棉花生産の一般的な特質をなすものである。

南方諸地域に於ける棉作適地の存在については、右の如く會つて棉作の發達した地域のあること、或ひは現に多かれ少かれ棉作の行はれてゐることが、一應、それを物語つてゐる。現にまた、棉作適地は、南方の各地に存在してゐる。佛印、泰國、比律賓、蘭印、等何れも問題となり、或ひは既存棉作地たる緬甸も考慮のうちに入れられてゐる。更に視野を擴げれば、濠太刺利にも棉作に好適な廣大な地域が残されてゐる。これらの諸地域に於ける具體的な事情については、未だ充分明かにされてゐない點も少くないやうであるが、少くともそこに棉作の可能性は考へられる。以下、個々の地域について概観しようと思ふ。

(3) 南方諸地域に於ける棉作適地として、今日問題にされてゐるものゝ一つに先づ佛印があげられるが、こゝに於いても、現在の棉作は極めて遅れた状態におかれてゐる。一九三七年に於いて、棉花栽培面積は一五千陌、生産高一二千瓊(二〇千擔(佛印統計年鑑))に過ぎず、陌當り平均收量は一三擔と言ふ少量である。然しこの棉作の未發達は、こゝに於けるその自然的基礎の缺如によるものではなく(但し次に見るやうに異論もある)、むしろ、それは概して良好とされてゐるのである。

2) *Annuaire Statistique de l'Indochine, 1936-1937*, 以下佛印統計年鑑とは本書を指す。なほ上記面積は、*International Institute of Agriculture, International Yearbook of Agricultural Statistics, 1939-40*, 所載のものとは少し異なるが、こゝでは佛印統計年鑑のものを採る。

佛印が棉作地として適當な自然的基礎を有しながら、何故こゝに棉花生産が發達しなかつたかについては、種々の理由があげられるだらうが、その重要な點は——他の場合と同じやうに——こゝの植民地的性格から理解されるであらう。土着農民は棉作に對する經濟的條件を缺き、また佛蘭西本國は、こゝに積極的に棉花の栽培を行はうなどとはしなかつた。實際には、曾つて栽植企業による棉花栽培の試みもなされたが、それも失敗すると共に一時的なものに終つてしまひ、以來、佛蘭西本國は、こゝに於ける棉花生産を全く放棄した形である。失敗の原因については、ソルボンヌ大學のシャルル・ローブカン教授は、灌漑の不可能と勞働力不足による原價高のためであつたとしてゐる。³⁾然し、これらの點は、解決不可能な、それほど絶對的な障害をなしてゐたのかと言ふに、必ずしもさうではないやうであり、また失敗の原因は、むしろ、合理的な對策の缺如によるところが少くなかつたやうである。⁴⁾佛蘭西本國の佛印に於ける棉花生産對策の不備については、既に米棉、埃及棉の試作の場合、佛印の自然的條件を充分考慮せず、そのため品種選定の不充分であつたことなどにも認められてゐる。⁵⁾

元來、佛蘭西本國は、必ずしも佛印に棉花を求めらるることを必要とせず、そこに於ける棉作の發達、續いて起るであらう紡績業の發展は、むしろ佛蘭西本國の利害と相對立する關係にあるのである。佛蘭西は、綿業國としても、規模に於いて、世界第七位に位する主要綿業國の一つであるが、國內では棉花は生産されず、原棉は、これを米國をはじめ印度、埃及等よりの輸入に依存してゐる。敢へて遠隔の佛印に棉花を求めるとすれば、これらの國々から輸入する方が佛蘭西として有利なのに違ひない。そして佛印の綿布は、大半佛蘭西から輸入されてゐるのである。主要綿業國の一つたる佛蘭西が、その植民地佛印に、積極的に棉花生産を行はうとしなかつたのも、か

- 3) シャールル・ローブカン著 (1939), 外務省南洋局譯刊, 佛領印度支那經濟發達史, pp. 130—131.
- 4) 西澤基一, 佛印の纖維資源論, ダイヤモンド, 昭和17年1月21日, pp. 16—18.
- 5) 榎本中衛教授, 佛領印度支那の棉作, 紡聯月報, 昭和16年10月, p. 49.

うしたところにその根拠が求められるだらう。そしてこのことからまた、佛蘭西本國に於いて、佛印の棉花生産に對し恐らく充分の熱意が有たれなかつたことも理解しうるだらうと思ふ。

このやうな佛蘭西の政策に關しては、更にまた、現に本國或ひは佛印側に於いて、佛印に於ける棉作は困難であり、或ひはその發達の可能性は乏しいとする見解の少くないことも指摘されねばならない。この點は、我々の現實の問題にも關聯することである。例へば前掲のローブカン教授は、佛印に於ける棉花生産の困難を指摘して、それは『現在の所では勞力豊富な地方に土人式に栽培する外發達の見込はないとされてゐるが、之等の地方には既に土人の最も愛耕する米作が隙間もなく行はれて居り進出の餘地は全然ない。棉作は乾作栽培でありながら水を必需し開花期には降雨の害を蒙る等全く不規則極まる栽培であるが、四圍の狀態は之等條件の急激改善を至難ならしむるものがある』⁶⁾と述べて居り、また別の論者によつても『元來、佛印の氣象的條件は、棉作の栽培に不適當である。……棉作の改善上、地方の習慣に變更を加ふべきもの多々あり、而かも之が實行は頗る困難である』⁷⁾とされてゐる。或ひは前佛印農事監事官イーヴ・アンリーの如きも、佛印に於ける棉作はあまり有望でないことを指摘してゐると言ふ。⁸⁾

然しながら、佛印に於ける棉作の諸條件は、このやうに棉作の可能性、發展性を否定するが如きものであらうか。そこに於ける棉作について、佛蘭西本國がその必要を見なかつたこと、その故か過去の棉作に對する研究は必ずしも充分でなく、また積極的な或ひは合理的な對策に缺如せるところのあつたこと、等の事實を考へるとき、更に吟味が加へられなければならぬことを想はしめるやうである。

6) シャルル・ローブカン著、前掲邦譯、p. 131.

7) 8) 佛印の棉花栽培、南洋、昭和16年7月、p. 64.

佛印に於ける棉作の可能性については、最近行はれた榎本中衛教授の現地に於ける實地調査によつて、可なり詳細に報告されてゐる。⁹⁾ 佛印の現在の棉作地は大部分安南とカンボヂヤに存在し、その他には極めて少い。榎本教授の調査は右の兩地方（安南については主として北部）を主とするもので（然し此の外、南部東京及び交趾支那にも亘られてゐる）、その結果によれば、兩地方に於ける棉作の自然的條件、棉作事情には種々の異同があり、また棉作に障害となる點も一部には存在するが、それも絶對的なものでなく、要するに棉作の可能であることが充分認められてゐる。その諸條件に關する若干の要點を摘記すれば、それ／＼次のやうに要約することが出来るだらう。

一、土壤、氣象等の點については、概して支障なく或ひは良好である。たゞ氣象關係については、棉作が水稻の後作とされてゐる地方があり（北部安南——そのため氣象は棉作に必要な條件と逆行する）、或ひはその他旱魃、減水の遅延等に對する考慮の必要から、そのため生育期間の短い品種、即ち極早熟種を用ひることが必須條件である。更に旱害を避け、排水を計るため整地が根本的に必要であるやうに指摘されてゐるが、先きのロープカン教授の如く、別に灌漑が不可能であるとは云はれてゐない。

一、品種は、大體在來棉（アジア棉種）、陸地棉（米棉種）であるが、前者は品種が適當でなく、そのため纖維の品質も劣悪で、纖維長は二分の一吋以下である。これに對し陸地棉は八分の七吋級のものが生産されてゐる。反當り收量の少いことは、先きにも指摘したところであるが、この調査に於いても同様のことが更に具體的に示されてゐる。そしてこの反當り收量の少い理由は、北部安南では、（一）品種が適當でないこと、（二）米作との關係上晩熟品種を用ひることが出來ず、且つ生育緩慢なる上に出來るだけ早く收穫せねばならないこと、（三）施肥が少く、その上使用方法に幼稚な點のあること、（四）條播の方法がよくないこと、等により、またカンボヂヤでは、（一）全面積單作でなく、綠豆または小豆との間作なること、（二）栽培方法幼稚なること、等による。従つてこれらの點に改善を加へれば、自ら反當り收量も増加するとされてゐる。

一、栽培に關しては、右の説明のうちにも示したやうに、棉花の栽培は、普通、水稻の後作、或ひは他の作物との間作として行はれてゐる。

9) 榎本中衛教授、前掲稿、pp. 47—62. 更に他の論者によつても、佛印に於ける自然的條件は棉作に好適であることが指摘されてゐる。cf. Ennis, T. E., French Policy and Developments in Indochina 1936, p. 116.

一、收穫された棉花は販賣されるが（但し、一般に全部販賣されるのか、或ひは一部自家用などにも用ひられるのか、この點充分判断し難い。別の記述によれば、佛印の棉作は主として自家消費を目的としてゐるとも言はれるが、佛印の場合には、これもなほ吟味を要するのではないかと思ふ）、採算的關係は概してよくない。例へば『大體勞銀一日二〇仙として自家勞銀を償ふか否かの境目にある程度なるべし』と言ふ状態である。他方、米、玉蜀黍、豆類などの收入と比較して棉花の收入は少く、従つて棉作は阻害されてゐる。こゝに棉作を奨励するためには、前記の反當り收量の増加を計ることが必要となる。

一、更に棉作面積擴張の可能性に關しては、安南（北部）に於いては『推定は困難』であり、カンボヂヤにあつては、具體的には單に官廳側の談として、コムボヂヤム縣に於ける未墾地四萬町歩に達すると指摘されてゐるに過ぎない。然し、特にカンボヂヤに於いては、人口少くまた勞働力の質も劣るため『従つて現状にては急激なる棉作面積の擴張を望むこと能はず』と言ふ状態である。擴張面積の點は、榎本教授により右のやうにふれられてゐるに止まるが、我が紡績聯合會の一當事者は、佛印に於いては『今後簡單なる開墾事業によつて棉作地となり得る赤土帯は三百萬ヘクタール、メコン河の氾濫を防止する事によつて棉作地となり得る土地一千萬ヘクタールと稱せらる』¹¹⁾と傳へてゐる。これが事實とすれば、増産の餘地は極めて大である。前者の赤土帯のみを以つてし、一陌當り平均收量を假りに現状のまゝの一・三擔（全佛印の平均）としても、年約四〇〇萬擔近い棉花の生産が可能となるはずである。然しこれらの實現性の如何は、勿論なほ今後の諸條件に俟たなければならぬだらう。

我々は、こゝに、佛印に於ける棉作が甚だ遅れた状態にあること、その自然的基礎は棉作にさして支障を與へず或ひは良好であること、然しそこには社會的・經濟的な諸問題が介在してゐること、等々の事實を知るのである。これらの點については、なほ必ずしも充分盡されてゐない點があるにしても、然し少くとも自然的基礎に關する限り、佛印に棉作の可能なことは、この調査の明かに示すところである。そして、佛印は棉作に不適當であると言ふ先きの佛蘭西側の否定論に對する我が國専門家のこの肯定論は、重要且つ興味ある對照をなすものであるが、この肯定論をとりうるとすれば、それはまた、日本の調査・研究の勝利を示すものである。

10) 伊藤律，南方農業社會經濟論（東亞政治と東亞經濟，昭和16年7月，所收）
D. 76.

11) 南方纖維資源の將來性，紡聯月報，昭和16年9月，p. 1.

(4) 泰國も南方の棉作適地として注目されてゐるものゝ一つである。この國では古くから棉作が行はれ、その棉花は自家用の紡織原料に供せられたばかりでなく、最盛時には盛んに輸出まで行はれたと言ふ。然し、輸入綿製品の侵入によつて手工紡織は驅逐され、それと共に棉作も衰退してしまつた。また商品生産のための棉作も世界大戦後の棉花相場の暴落に對抗出來ず、一時は全く放棄の止むなきに至つた。¹²⁾近年に至り『棉作復興』のためやゝ回復の傾向も見られるが、然しなほ近年の棉花栽培面積は四―五千陌から七―八千陌の程度であり、生産高も一九三七年三二千擔、一九三八年二〇千擔(國際農業統計年鑑¹³⁾)を示してゐるに過ぎない。

然し既往に於ける棉作發達の歴史が示す如く、泰國は、棉作地として好適な自然的基礎を有つてゐる。即ち棉作の適地とされてゐるところでは、同一品質の砂質壤土が廣汎に亘つて存在する地方が少なく、氣象的にも雨期と乾期が截然と區別されてゐるが、これらは、何れも棉作に有利な條件をなすものである。また害虫の被害も比較的少く(但しこの點は棉花の品種により必ずしもさうでない)、或ひは氣象の關係上雜草が繁茂しにくいいため除草にも多くの勞働力を要しないと云ふ。現在、棉作地は、東北部、北部、中部の諸地方に存在するが、主要部分を占めてゐるのは東北部で、そこは、地形、土壤等特に好適な棉作地である。陌當り平均收量は、一九三八年三・四擔にして、同じ年に於ける亞米利加の場合と匹敵してゐる。栽培については、例へば中部では適地が少いため、米、玉蜀黍などとの二毛作が行はれてゐるが、東北部では、耕地に餘裕があるためかゝる必要もない。¹⁴⁾

棉花の品種は、大體在來種によつてゐるやうであるが、近年、カンボヂヤから米棉種の輸入が行はれてゐる。

この米棉種は、泰國に於ける害虫に拮抗しえない缺點を有つてゐるが、他方、乾燥した地域、排水の良好な沖積

12) 東亞經濟調查局、南洋叢書、シヤム篇、昭和13年、pp. 256-258.

13) International Institute of Agriculture, International Yearbook of Agricultural Statistics, 1939-40, 以下、國際農業統計年鑑と言ふは本書を指す。

土壌にはよく成長し、栽培の結果では、米棉種は在來種より遙かに優れてゐることが示されてゐる。¹⁴⁾こゝにも今後の問題として、品種改良の餘地が少くないことが知られる。收穫された棉花は、東北部、北部では、大體自家用に供されてゐる。たゞ中部のものが少量輸出されてゐるに過ぎない。¹⁵⁾

棉作に好適な自然的基礎を有つに拘らず、泰國に今日それが發達してゐないのは、既に指摘した如き理由にもよるが、然し更に見逃せないのは、こゝに支配的勢力を有つてゐた英吉利の政策が、この泰國の棉作を強く抑壓して來たことである。このことは、印度、埃及を有つ英吉利が、泰國の棉作の發達を決して傍觀しえなかつたことから知られるであらう。そしてこゝにも、植民地的性格が色濃く反映されてゐることは注意されねばならぬ。¹⁶⁾

然し、泰國に於ける自然的基礎が棉作に好適であることは、既に、『棉作復興』となつて現はれてゐる。この棉作復興の意義については、それを、國際的商品としての性質の稀薄な米から、かゝる性質の豊かな棉花への轉換、その農業資本主義化の點に求める見解も存在するが、¹⁷⁾然し、右に指摘したやうに、この棉作が從來英吉利の好まなかつたところであつたことから見れば、棉作復興は、この國の自主性の回復を反映するものであり、そしてかゝる點にこそ、更にその重要な意義が求められるだらう。¹⁸⁾棉作復興に際しては、曾つて我が國の三原博士がこの國に招聘され、調査の結果、將來一〇〇萬俵の棉花が生産可能であるとされ、第一期計畫として、五ヶ年間一〇萬町歩、一〇萬俵案を立てられた。¹⁹⁾またこゝでは、我が臺灣拓植會社が子會社臺灣棉花(昭和十二年創立)を通じて棉作に着手してゐる。これらの事實は、泰國の棉作が、既に我が國と密接な關係を有つてゐることを示すも

14) 東亞經濟調査局、前掲書、pp. 257—259.

15) ナイ・アリヤント・マクニン稿。南洋協會調査部譯、タイ國の植物纖維、南洋、昭和16年7月、pp. 25—26.

16) 同上、p. 25、緒方正、南方國の經濟的價值、昭和16年12月、p. 297.

のである。

泰國の隣に接する緬甸は既存の棉産地であり、一九三九年に於いて、棉花栽培面積一四七千陌、生産高二八八千擔（國際農業統計年鑑）を示してゐる。開墾可能な未耕地も相當存在するので、増産の餘地もあるだらう。

(5) 比律賓の棉作問題は、大東亞戦争の進展を契機とし、新たな意義を以つて登場するに至つた。砂糖の過剰化対策として、砂糖栽培地を棉作地に轉換せしめ、以つて共榮圈内に於ける棉花の補給を計らんとしてゐることは、既に人々の問題としてゐるところである。然しこゝに於ける棉作は、必ずしも最近急に日程に上つて來たのではない。既に一九三四年のタイディングス・マクダファイ法によつて、比律賓の對米砂糖輸出はやがて著しく不利な位地におかれることとなり、その一対策として棉作問題がとりあげられてゐたのである。

然し比律賓に於いても棉作の位地は未だ極めて小く、一九三七年の栽培面積は約二千陌、生産高は八・三千擔（國際農業統計年鑑）に過ぎない。けれども、棉作適地はこゝにも各地方に見出され、今後におけるその發達の可能性も一應與へられてゐる。即ち、現地に於ける棉作の調査結果によれば、そこには棉作に適する自然的基礎の存在することが明かに示されて居り、そしてこれらの調査結果から見ると、その諸條件並びに棉花栽培の結果等は、大體次のやうである。²⁰⁾

今日、棉作の主要地をなしてゐるのは、バタンガス（ルソン島南部）、及びイロコス（ルソン島北部）の兩州であるが、この兩地方では、土壤、氣象とも概して棉作に適してゐる。即ち土壤は砂質壤土であり、氣象は乾期と雨期が截然と區別されてゐるため、何れも棉作に有利である。その他の地方について見ても、土壤の點では、砂糖栽培

17) 東亞經濟調査局、前掲書、p. 258.

18) 小牧實繁教授、日本地政學宣言、pp. 88—89, pp. 102—111 参照。

19) 滿鐵調査局、前掲書、p. 259.

20) エヘルシスト及びクルース稿(1929)、田中長三郎譯、バタンガス及びイロ

培地として良好なところは、また棉作に適してゐることから見て、各地に棉作適地の存在することが知られる。氣象關係については、比律賓のそれは各地で可なり異つてゐるが、比律賓中央氣象臺の氣象調査並びに棉作試験の結果によれば、棉作適地として利用しうるところは、右兩州の外なほ各地に存在する。

棉花栽培の結果も概して良好である。品種は、試験の結果、ボタンガスホワイト及びカバスパウなる二種のみが適してゐるとされてゐるが、これらは、收量、纖維長、何れも良好な結果を示してゐる。前者は、纖維長一吋十六分の一乃至一吋八分の一、繰棉歩合三一%、陌當り收量三・三擔、後者は纖維長一吋六分の一乃至一吋、繰棉歩合二九%、陌當り收量二・五擔と報ぜられてゐる。纖維長は特に良好で、これが事實とすれば、上級棉花の乏しい共榮園内に於いて注目さるべき存在であらう。更に専門家の研究に俟ちたいと思ふ。

何れにしても、比律賓に棉作適地の存在することは確認しうるだらう。それにも拘らず今日棉作が極めて未發達な状態にあるのは、種々の理由があるにしても、然し、この場合にも亦、比律賓の棉作は、亞米利加の決して好むところではなかつたと言ふことが想起されねばならない。今後の可能性については、別の調査によれば、現在の棉作適地、砂糖栽培地の一部轉換、耕作可能面積の一部開發により、向ふ五ヶ年間に繰棉六〇萬擔の生産が可能であると推定されてゐる。²¹⁾而かも比律賓側では、既に今日に至る以前に、比律賓棉花の市場として日本を求めて居り、前掲の調査者は『日本は現に大きな市場（棉花の——引用者）であるが、……フィリッピンに於て棉を大量に而も他の各國と充分競争出来る程安價に生産出来るならば、比律賓農民は棉が重要作物の一であることを見出すに至るであらう』²²⁾と述べてゐるのである。

コロ州に於ける棉花の調査、南支南洋、昭和16年8月、pp. 17—34。エライダ及びドゼス稿(1938)、田中長三郎譯、比律賓棉花の栽培、南支南洋、昭和16年9月、pp. 62—63。

21) 大東亞共榮園の産業再編、東洋經濟新報、昭和17年2月8日、p 48 參照。

(6) 蘭印に於いても、差當り、砂栽培糖地の一部轉換策として棉作が問題にされてゐる。こゝでも古くは農村で自給的な棉作が行はれてゐたが、それも他の場合と同じやうに、外國製綿製品の侵入と共に衰退し、近年では、棉花栽培面積は一〇千陌前後(ジャワ、マヅラのみ、生産高は不詳、一九三八年に於ける輸出高三五千擔——國際農業統計年鑑)に過ぎない。こゝに於ける棉花生産の可能性についても、佛印の場合と同じやうに——問題の内容は必ずしも等しくはないが——異論が見出される。一方に於ける事實としては、從來、蘭印でも棉花の試験的栽培が行はれて來たがそれは充分成果をあげえず、概して失敗の歴史に終つてゐることが指摘されてゐる。現にまた、例へば一九一一年スラバヤに於いて主として棉花問題に關して開かれた纖維會議の結論は、蘭印の棉作に關して極めて疑問的であつたと言ふ如き事實も存在する。そしてこれらの事實は、蘭印では工業原料として棉花の栽培に多く期待しえないことを明瞭に示すものとされてゐるのである。²²⁾

然るに他方では、ジャワをはじめ、小スタン列島の諸島、スマトラ、ボルネオ等の自然的條件は棉作に適して居り、且つ労働力の點に於いても極めて有利であるとされ、また和蘭側で蘭印の棉作を重視してゐた事實も見出される。グレッツァー博士は、蘭印が棉作に好適な環境を有つてゐるのに、それが發達しないのは、輸入綿製品が非常に廉く、従つて他の作物を栽培した方が有利であるからだと述べてゐる。このやうな事實に基けば、從來に於ける試験的栽培の『失敗』の歴史にも、佛印の場合に見たやうに、或ひは更に吟味を要するものがあるのではないかと思ふ。殊に蘭印の棉作に於いても、泰國の場合と同様、英吉利がそれを抑壓した事實のあることは注意されねばならぬ。²³⁾

22) エライダ及びドセス稿、前掲邦譯、p. 63.

23) 木全省吾稿、蘭領東印度に於ける工業化問題と我が綿布貿易の將來に就て、山口商學雜誌、昭和8年1月、pp. 71—72.

24) Gretzer, W. K. G., Grundlagen und Entwicklungsrichtung der Land-

蘭印に於いて棉作が可能であることは、曾つて土着民が棉花を自給してゐたと言ふ事實なども、それを物語つてゐる。試作の結果から得た可能性についても、例へば、我が南洋企業たる南洋興發會社は、ニューギニアで一應棉作に成功してゐることを示してゐる。²⁵⁾ またセレベスでは、上級の米棉が生産されることが報告されてゐる。²⁶⁾ 更に、最近、我が綿業關係者によれば、今後五六年に、蘭印で一〇〇萬擔の棉花が生産されるやうにさへ見積られてゐる。たゞかゝる見積りの實現性については、なほ吟味の餘地があるにしても（例へば差當り利用しうるであらう砂糖栽培面積などから見て）、そしてまた既往に於ける試験的栽培の『失敗』の歴史にも拘らず、蘭印に於いて棉作が可能であることだけは充分確認しえよう。また蘭印に於ける葡萄領チモールに於ても、南海岸は棉作に極めて好適であると言はれてゐる。

(7) 南方に於ける賣大な棉作適地として殘されてゐるところに、更に濠太利がある。ンドニー大學 H. L. ハリス教授は、この棉作の將來について次のやうに述べてゐる。

『棉花は將來オーストラリアの經濟資源中現在より重要な地位を占むべきものである。この植物の栽培は約二〇吋の降雨量と氷點以上の溫度が二百日続くことと、それに深い砂質層を必要とする。これらすべての條件はニューサウス・ウエールズの海岸帯域、東部及び北部クイーンズランド、ノーザン・テリトリー、ウエスタン・オーストラリアのキムバレー地方の廣大な地帯に見出される。……〔オーストラリアで引用者〕棉花の大量生産を妨げてゐるのは氣候の關係ではなく經濟的理由による』²⁷⁾ としてハリス教授の引用してゐる他の論者、R・ハーディングは、棉花に對する可耕地を五八七、〇〇〇平方哩と見積つてゐる。

ハリス教授によれば、濠太利に於いても、前世紀の六十年代末から八十年代初めにかけて一時棉花の生産が發達し、その輸出も行はれたのであるが、亞米利加との競争に敗退し、以來、それは急速に衰退してしまつたの

南方纖維原料の生産について

第二卷 二七七・第一號 二七七

wirtschaftlichen Erzeugung in Niederländisch-Indien,* 1939. 救仁郷繁譯。蘭印の農業經濟, pp. 211—212, 別技篤彦, 蘭領印度, 昭和16年, pp. 215—216.

25) 南方資源對策を語る, 東洋經濟新報, 昭和17年1月24日, p. 21.

である。²⁶⁾ 現在では、棉花は少量のものが生産されてゐるに過ぎない。濠太刺利が今後どのやうな形に於いて日程に上つて来るか。我々は、こゝではたゞ、濠太刺利は、單に羊毛、小麥或ひは動物性食料品の大量生産國たるばかりでなく、棉花についても、廣大な適地を有つてゐると言はれることを指摘しておくに止めよう。

(8) 最後に、既存の大棉産地たる印度についても、一應言及されねばならぬだらう。印度の棉花生産高は、一九三八—九年度に至る五ヶ年間の平均年約一六百萬擔餘に達して居り、そのうち大體年平均約一〇百萬擔を輸出してゐる。假りにこれが確保されるならば、量的に見る限り、共榮圈内の不足量は大體みたされよう。然しこゝでは、單にかゝる事實を一應指摘しうるに過ぎない。また質の點では、この印度棉を確保しえてもなほ解決されない。印度棉は、太絲用の棉花で纖維が短いからである。その大部分は八分の七吋以下のものである。²⁷⁾ 更にまた、よしこの印度棉が確保されたとしても、日滿支に於ける棉花増産對策或ひは南方諸地域に於けるその補給對策の必要が、勿論解消し去るものでないことは、こゝに指摘しておかなければならない。

(9) 以上に見るやうに、南方諸地域には、棉作適地が各地に存在して居り、我々は、そこに棉花培養領域を求めることが出来る。然し、棉作の自然的基礎は與へられてゐるとしても、これらの地域から、近き將來、現實に幾何の棉花を求めうるかを具體的に示すことは、恐らく容易ではない。例へば利用可能の面積に關しても、現に、例へば佛印の現地を調査された榎本教授は、先きにも指摘したやうに、比較的事情の明かなこの地について記されるところ少く、北部安南の如きに於いては『擴張面積の推定は困難なり』とされてゐるが如きである。然しまた、地方に於いては、既に、我が紡績聯合會によつて南方に於ける棉花栽培計畫として十ヶ年計畫案なるものが

26) 東亞經濟懇談會. 東亞經濟懇談會第二回總會報告書, 昭和15年11月, p. 177.

27) 28) Harris, H. L., The Economic Resources of Australia, 1934, 陸軍省主計課別班譯, オーストラリアの經濟資源, p. 93.

29) Imperial Economic Committee, Industrial Fibres, 1936, p. 17.

立てられて居り、その内容は、差當り第一次五ヶ年計畫として、佛印、泰國、比律賓、蘭印、緬甸に於いて、面積一〇〇萬町歩、生産高三〇〇萬擔を目標とし、更に第二次計畫では、これら各地に於ける増産を計ると共に、更に、ボルネオ、ニューギニアに於ける棉作に着手せんとするものである。これらの基礎が、具體的に如何なるところに求められてゐるかはこゝに詳にしないが、この計畫案は、今日、關係業者によつて、南方諸地域に於ける棉作の可能性がどのやうに見られるかを示してゐる點に、その一つの意味を有つてゐるであらう。然し何れにしても、南方諸地域に於ける棉花の生産は、今日の緊急な課題であり、基本的な調査と共に、實施の具體的な方法が急速に講じられなければならない。

(10) 然しながらまた、我々はこゝに、あまりにも多く南方に眼を奪はれる前に、なほ支那棉花の増産問題をふりかへつて見る必要があるだらう。南方諸地域から相當の棉花がえられるにしても、支那は依然東亞に於ける最も重要な棉産國であり、支那棉花の増産こそ更に緊急な課題をなすものである。殊に、例へば支那に於いては從來その生産が不可能なる如く考へられてゐた上級棉花が、最近、關係機關の研究結果により、支那に於いても生産されることが明かにされてゐる。³⁰⁾これは、上級棉花の缺乏に當面してゐる今日、重要な收穫であらう。然るに、支那棉花の増産計畫は、現に見る如くその圓滑なる進行が妨げられてゐる。そしてそこには、人々の指摘するやうに、治安の不安定、價格政策及び收買機構の不備、或ひは全體的な増産機構の不整備、等々の理由が存在して居り、またこれらの點は勿論それ／＼問題とされねばならないが、然し更にこゝに省みられなければならないのは『從來中國棉花増産事業のために充分なる準備と眞摯なる努力とが拂はれて來たかどうか』³¹⁾と言ふ點である。

30) 東亞經濟懇談會，前掲書，p.177.

31) 白石幸三郎，支那棉花増産事業の緊急性，紡聯月報，昭和16年12月，p.7.

經緯は、關係者達の既によく知るところである。こゝでは、問題の所在を指摘すれば足りるであらう。

これらの問題は、然し單に支那棉花の増産問題のみにかゝはることではない。南方諸地域に於ける棉花或ひはその他の纖維原料の生産計畫が、愈々具體化せんとしつゝある今日、我々は、支那棉花増産問題のうちから、多くの教へられるものがあることを知らねばならない。

三 羊 毛

(1) 羊毛は、動物性纖維として特殊な性能を有つ纖維であり、用途の上に於いても、一般的を需要の外、特に軍需用として重要な役割を與へられてゐる。然るに一般に東亞に於いては、牧畜業は極めて未發達の状態におかれて居り、このことは、東亞に於ける廣い意味の農業の重要な特質をさへなしてゐるのである。羊毛についても、東亞に於いては、滿洲、支那に於ける所謂カーベット・ウールの外には殆んど生産されず(滿洲、支那以外にも若干の緬羊は飼育されてゐるが、産毛量の如きは言ふに足りない。カーベット・ウールは印度にも相當多量に生産される)、即ち、この地域は、牧羊業の發達を見ない、言はゞ羊毛缺乏の土地である。當面問題とされてゐる共榮圈内に於ける不足纖維原料のうち、その不足の程度から言へば、羊毛のそれは棉花より遙かに深刻であり、この點では、羊毛は、後に述べる黄麻と同様な關係におかれてゐる。

東亞に於いて近代羊毛工業國として發達してゐるのは、日本を數へるのみである。滿洲國、支那にも羊毛工業は存在するが、近代工業としての規模は未だ極めて小さい。それ故、これらの地域で消費される羊毛は、大半日本で用ひられてゐる。羊毛の需要に關しては、此の外、共榮圈内に於いて從來歐米諸國から輸入されてゐた羊毛製品についても考慮されねばならない。

らうが、何よりも問題は日本の場合に存在する。日本は、日支事變前に於いて、年約二億封度以上（昭和十一年迄の五ヶ年平均年二一八、六六八千封度）の羊毛を輸入してゐた。これには、滿洲國、支那からのものも僅かながら含まれてゐるが、その大半は濠太刺利及びその他東亞以外の諸國からの輸入であり、就中、濠太刺利からの輸入が壓倒的部分を占めてゐた。然し最近注目されるのは、滿洲國、支那からの輸入が急速に増大してゐることである。例へば昭和十四年の羊毛總輸入量約一億封度のうち、右兩國（特に支那）からの分が二五・八%に上つてゐる。従來、日本で殆んど使用されなかつた滿洲・支那羊毛の利用は、今日、日本の羊毛工業に課せられてゐる重要な一課題であるが、右の事實は、最近、これらの羊毛の利用が促進されつつあることを示すと共に、また、これらの羊毛の重要性を物語るものである。實際には、日本に於いても、滿洲・支那羊毛の利用方法を講ずべきことが、會つてより提唱されてゐたにも拘らず、従來、顧みられることが極めて少なかつたのである。

滿洲、支那は、その自然的條件から言へば、綿羊の飼育に必ずしも好適とは言へないにしても、然し、そこで綿羊を飼育することは充分可能である。この兩國に於いても、羊毛生産上重要な位地を占めてゐるのは支那であるが、支那では、綿羊の飼育は主として西北地方で行はれてゐる。

滿洲・支那羊毛に於ける重大な難點は、纖維の質が甚だ粗惡なことである。それは、例へば、纖維が太く且つ短く而かも不揃であること、弾性に缺けてゐて脆弱であること、等の外、更に種々の自然的或ひは人爲的缺點を有つてゐる。²⁾ 従つてこれらの羊毛は、一般の毛織物原料（特に梳毛絲紡績用）としては不適當であり、主として絨氈用原料として用ひられてゐる。然しかゝる品質の粗惡なことも、主として綿羊の品種或ひはその飼育方法の原始的なことによるものであり、従つて、そこには多くの改良の餘地が残されてゐるのである。

滿洲、支那に於ける綿羊頭數、羊毛生産量については、正確なことを知り難く、一般に大體の推定が行はれてゐるに過ぎない。その推定結果にも種々の異同があるが、近年の事實として、大體次のやうに見られてゐる。

1) 井島重保, 羊毛の研究と本邦羊毛工業, 昭和4年, pp. 185—186.
2) 例へば, 齋藤道雄, 滿洲及支那の羊毛資源に就て (紡織雜誌社, 大陸と纖維工業, 昭和14年, 所收) pp. 1—15, 舊國民政府全國經濟委員會編 (民國24年), 中支建設資料整備事務所譯, 支那の毛織工業, pp. 36—38.

	頭數(千頭)	生産量(千封度)	備考
(A)	四〇,〇〇〇—四五,〇〇〇	八六,六六五	支那、滿洲を含む如し
(B)	三五,〇〇〇内外	六九,二〇〇	支那のみ
(C)	三四,〇〇〇	一一〇,〇〇〇	支那、滿洲
(D)	—	一一,一〇〇	滿洲
	—	四七,六二〇	支那
	—	五八,七二〇	合計

(備考) (A) 全國經濟委員會、前掲邦譯二〇頁、二八頁參照。(B) 滿鐵調查部、最近の中國羊毛事情、滿鐵調査月報、昭和十一年三月、二〇八頁參照。(C) 英帝國經濟委員會調查、Imperial Economic Committee, Industrial Fibres, 1936, p. 30, p. 32. (D) 齊藤道雄、前掲稿、八頁、一二頁參照。單位の異なるものは何れも封度に換算。

然しこれらの數字も、單にこれだけの緬羊頭數及び羊毛生産量があると言ふのみで、既に指摘した如く、その利用性は著しく制限されてゐる。また假りに羊毛生産量の上から見て、右の表に於ける最高數字たる一一〇百封度をとつてみても、事變前に於ける日本の羊毛需要量の半ばをみたしうるに過ぎない。而かも滿支の國內需要も考慮しなければならぬ。何れにしても、今日、滿洲・支那羊毛に多くを望むことの困難なことは明かである。

こゝに必然的に問題となるのは、これらの地域に於ける緬羊の改良増殖であり、そして現に日滿支を通ずる羊毛生産計畫に於いて、緬羊約九百萬頭増殖の計畫が行はれてゐる。然しこの計畫が實現しても、需要を充たす域にはなほ達しえず、而かも自給計畫を急速に達成することの困難は、當局者自ら認めてゐるところである。³⁾ かくして羊毛の場合にも、南方諸地域のうちに緬羊飼育の適地を求めることが、緊急な課題として與へられてゐるのである。

(2) 然るに、既に指摘した如く、元來、東亞は、牧畜業の發達を見てゐない地帯である。このことは支那のみ

3) 東亞經濟懇談會、前掲書、p. 536.

について言ひうるのではなく——相對的にはむしろ支那はそれが發達してゐる方である——南方諸地域に於いても同様である。例へば次のやうに言はれてゐる。『支那、印度、日本、ジャバ、印度支那、朝鮮、フィリッピン諸島等々に於ける牲畜の役割はヨーロッパ、アメリカ、アフリカ及び近東の農業と比較して、全然異つたものであり、殆んど謂ふに足りない程度のものである。……原則として牧畜は、衣服及び靴類の製造原料を供給するものではない』⁴⁾——然し、これらの事實は、凡ての場合、必ずしも牧畜に必要な自然的基礎の缺如によるものではない。そこには、東亞に於ける農業の特質並びにその他の社會的・經濟的諸條件が、重要な制約的要因として働いてゐることは注意されねばならない。

實際には、南方諸地域に於いても、その農業との關係に於いて、役畜を主とする家畜（或ひは屠殺用の家畜）は各地で飼育されてゐる。然し緬羊の飼育に至つては、極めて遅れた状態にしかない。緬羊頭數について見ても、例へば、佛印一七・五千頭（一九三七年——佛印統計年鑑）、蘭印一、三三七千頭（一九三五年——蘭印統計書）、比律賓一六九・三千頭、英領馬來二九・三千頭、緬甸八一・七千頭（以上は何れも一九三八年——國際農業統計年鑑）をそれ／＼數へるに過ぎず、また泰國では、この國の官廳統計年鑑⁷⁾の家畜の項にも、緬羊は全然計上されてゐない。

このやうに貧弱な緬羊飼育の状態は、それが、凡ての場合必ずしも自然的基礎を缺くが故に齎らされたものでないにしても、然し、それでは、南方諸地域に、これに適當な自然的基礎を有つ地方を多く求めうるかと言ふに、勿論直ちにさうは言へない。元來、緬羊の飼育は、氣候、風土等の影響を受けることが多く、それは、氣温、雨量、土壤、或ひは牧草の如何等によつて制約される。そして、これらの諸條件から見ると、一般に熱帯地方

4) 5) マヂヤール著、井上照丸譯、支那農業經濟論、第五章、參照。

6) 蘭印經濟部中央統計局編、大江・中原譯、蘭印統計書、1940年版、以下、蘭印統計書と言ふは本書を指す。

7) Statistical Year Book of the Kingdom of Siam, 1933—35. 以下、泰

は緬羊の飼育に適當でなく、従つて熱帯地方にある南方諸地域に於いても、そこに、緬羊飼育の適地を見出すことは概して困難と言はざるをえないであらう。

然しながらまた、熱帯地方の凡てが緬羊の飼育を困難ならしめるかと言ふに、必ずしもさうではない。現に熱帯地方にして緬羊の飼育が行はれてゐるところもあり、その例として、亞弗利加及び南米の諸地方をあげることが出来る。従つてまた、南方諸地域に於いても、緬羊飼育の適地を求めることは、敢へて不可能とは言へないだらう。然し、これらの點については從來あまり明かにされてゐないやうであり、また私自身の用意の不足の故に、簡単に述べるに止めざるをえない。

(3) 南方諸地域のうち、緬羊飼育の適地として、差當り最も問題にされてゐるのは佛印であらう。佛印が牧畜に適當な自然的基礎を有つてゐることは、既に從來から一應指摘されてゐる。⁸⁾ 佛印の官廳當局者たるシャール・エヴァノの如きは、東京地方の牧畜を論じて、そこには必要な自然的條件が存在するにも拘らず、牧畜が『今日まで大なる發展を招來しなかつたのは寔に一驚に値する』⁹⁾とさへ述べてゐる。既に自然的基礎が與へられてゐるとすれば、緬羊飼育の著しい未發達についても、その根據は、當然、他の社會的・經濟的條件のうちに求められなければならないだらう。

緬羊飼育の適地として佛印の有つ自然的基礎については、最近、西澤基一氏によつて詳しく吟味されてゐる。その結果によれば、佛印に於いても、熱帯地方であるため、緬羊の飼育には種々の難點はあり、例へば、雨期、乾期が截然としてゐて雨量が平均的でないこと、或ひは荳科植物を缺くため牧場の價値の低いこと、等がそれで

國統計年鑑と言ふは本書を指す。

- 8) 東亞經濟調査局、南洋叢書、改訂佛領印度支那篇、昭和16年、p. 150.
 9) シャール・エヴァノ、佛印東京地方の牧畜、南洋、昭和17年1月、p. 85.
 10) 西澤基一、佛印の纖維資源(下)、ダイヤモンド、昭和17年2月1日、pp.

あるが、然し氣候の不利も佛印全般的ではなく、また荳科植物の缺如による難點も必ずしも絶對的な障害をなすものではない。そして緬羊飼育の適地としては、安南山脈を超えた、一、〇〇〇—二、〇〇〇米の高地に、氣候溫和な緬羊に好適した大高原が存在するとされてゐる。更に緬羊飼育可能數の推定については、ラオス、東京、安南の粗林面積一〇、五六三千陌（ラオス六、五〇七千陌、東京二、五〇三千陌、安南一、五五三千陌）の六割を牧場に利用可能と見、また一・五陌當り緬羊一頭の割として、合計四・三百万頭（正しくは四・二百万頭——岡部）、此の外草原に飼育しうるものを加へて總計五百万頭と見積られてゐる。¹⁰⁾

然しこの緬羊飼育可能數の推定については、前掲のシャル・エヴァノは、東京だけでも今後更に牧畜に利用しうる面積として五〇千平方軒（約五百万陌）存在すると見積つて居り、またそこでは、一陌當り家畜一頭を飼育しうるものと計算されてゐる。また別の見方によれば、佛印高原地帯に於ける緬羊飼育可能面積を二〇百万陌とし、その半分に一陌當り緬羊二頭として、合計一〇百万頭の飼育可能とも言ふ。このやうに種々の推定が行はれてゐるが、假りに五百万頭飼育可能とすれば、産毛量は一頭當り五封度として、合計二五百万封度となり（西澤氏は五百万頭で五百万封度と計算されてゐるが、これは過少な見積りであらう）、また一〇百万頭飼育可能とすれば、産毛量は合計五〇百万封度となる。こうしたことが實現しうるとすれば、羊毛缺乏の今日、寄與しうるところは蓋し少くないであらう。然し現在のところ、このやうな見積りは、恐らく、言はず假想的な推定の域を出でないであらう。そして、種々の異なる推定の行はれてゐることは、更に具體的な調査の必要を物語るものと言へよう。

然し何れにしても、佛印が緬羊飼育の適地たる自然的基礎を有つことは、既に認められてゐるところであり、その羊毛生産地としての實現化こそ、今後の課題たるものである。

佛印の外に更に緬羊飼育の適地を求めうるかどうか。この點については、いま充分に示してゐないが、比較的その可能性のある地域として考へられてゐるところに、例へばなほ比律賓の如きがある。ここでは、氣候不順のために緬羊の飼育は不可能

43—44, 西澤基一, 佛印の緬羊飼育の將來性(上), 新亞細亞, 昭和17年2月, pp. 14—27. 參照。

11) 南方纖維資源の將來性, 前掲誌, p. 1.

12) 東亞經濟調査局, 南洋叢書, 比律賓篇, 昭和14年, p. 206, p. 211.

のやうに會つては思はれてゐたが、その後漸次それが行はれ、緬羊頭數も増加の傾向を示してゐる。もつとも、それも未だ問題とすべきほどのものではないが、然し實際には、比律賓の自然的條件は緬羊の飼育に必ずしも不適當ではなく、對策の如何によつては、今後更にその發達の可能性も存在するやうに見られてゐる。¹²⁾これに對し、例へば、蘭印については、前掲のグレッツアー博士は『蘭領印度に於ける緬羊飼育はもともと問題にならない』と言ひ、その不振を述べてゐる。¹⁾現にまた、ジャワでは、官廳當局が土著民の牧畜を奨励してゐるが、從來殆んど見るべきものなく、而かも、耕地に制限されて牧場と稱すべきものも全く存在しないと云ふ。¹⁴⁾調査の結果、或ひは更に適地を見出すことも不可能ではないであらうが、これらの點は、更に別の機會に俟たざるをえない。

(4) 近き將來に於いて、所要の羊毛を、滿洲、支那から自給することは容易でなく、南方諸地域で若干得られるにしても充分でないとするれば、羊毛の自給は依然困難たるを免れない。こゝにその對策として問題となるのは他の諸纖維の代用である。元來、種々の纖維原料の間には可なり代替性が存在するが、羊毛については、¹⁵⁾特に他の纖維原料の代用的な利用が考慮されねばならぬだらう。然し羊毛自體について言へば、問題となるのは、言ふまでもなく、南方濠太刺利である。こゝは、人々の知るやうに、世界最大の羊毛生産國であり、年一〇億封度前後の羊毛を生産し、その大半を輸出してゐる。質的に見ても、そこでは、上質の羊毛たるメリノ羊毛が八〇%乃至八五%に及んでゐる。¹⁶⁾更にそこは、東亞に於ける細羊の改良増殖に資すべき種細羊の重要な供給地であることも見逃しえない點である。

然し、濠太刺利から羊毛が得られるとしても、滿洲、支那或ひはその他に於ける羊毛増産計畫が不要に歸するものでないことは——例へば棉花の場合と同様に——明かであらう。

四 麻 類

13) グレッツアー、前掲邦譯、p. 338.
 14) 阿部武道、西南亞細亞の纖維資源(六)、新亞細亞、昭和15年11月、p. 55.
 15) cf. International Labour Office, *ibid.*, pp. 19—22.
 16) Imperial Economic Committee, *ibid.*, p. 33.

(1) 麻は、その種類が多様に存在し、また用途の上に於いて、他の繊維と可なり異なる関係を有つ繊維である。種類は、亞麻(Flax)、苧麻(Ramie)、大麻(Hemp)、苧麻(市皮、苧麻—Ching-ma)、黃麻(Jute)、マニラ麻(Manila Hemp)、ケナフ(洋麻)、其他、等に亘つてゐる。用途については、他の纖維原料は、一般に主として衣料用及び家具用に用ひられるのに對し、麻類には工業用及び農業用(包装用の袋、綱索など)に使用されるものが可なり多い¹⁾。更にそれは、軍需用としても——量的には比較的少量で足りるが——また重要な役割を果せられてゐる。²⁾

東亞に於ける麻類の需給關係から言へば、これらの多種類に亘るものうち、大部分は、日滿支或ひは南方諸地域に於いて自給することが出来る。元來、この領域には麻の種類も多く、なかには、マニラ麻、支那産苧麻のやうな世界的に獨占的なものさへ存在する。マニラ麻の如きは、既に人々の知るやうに、今日ではその過剩化が問題になつてゐるほどである。然るにこゝに問題なのは黃麻であり、それは實に著しい不足を示してゐるのである。それは、印度によつて殆んど獨占されてゐるからである。従つて、麻類の生産については——後に述べるやうに、黃麻代用品としての他の麻類の増産が問題となつて居り、或ひはまた、今後、單纖維用の各種麻類の増産も必要となるであらうが——當面の對策の中心こそ、何よりも黃麻の自給策にあると言つてよいだらう。

(2) 東亞に於ける麻類の生産が、最近どのやうな状態にあるかは、次掲第一表に見る通りである。これらの各種麻類のうち、日本に於いては、亞麻のみは大體自給出来るが、その他のものは從來可なり輸入に依存してゐる。第二表は日支事變前に於けるその輸入狀況を示したものである。然しこのうち、亞麻、苧麻、大麻は殆んど滿支からのものであり、問題はない。最も主要部分を占めるマニラ麻についても既に解決されて居り、

1) cf. International Labour Office, *ibid.*, pp. 18—19.

2) cf. Emeny, B., *The Strategy of Raw Materials 1934*, pp. 145—146.

3) Imperial Economic Committee, *ibid.*, pp. 72—73.

第一表 東亞に於ける麻類國別生産高(單位千斤)

種別	日本内地 (昭和五年)	朝鮮 (昭和三年)	臺灣 (昭和三年)	滿洲國 (昭和三年)	支那 (推定)	計	佛印 (昭和三年)	比律賓 (昭和三年)	印度 (昭和五年)
大麻	一八、八七二	二六、五九四		二、六六四	(一七、〇〇〇)	(三六、一四一)			
亞麻	六、一九九	六、七五五		四、〇〇〇	(二、〇〇〇)	(一五、七〇四)			
苧麻	五、七三三	五、五四四	一、九四四		(二六、〇〇〇)	(三三、六六一)			
苧麻		一九一		一八、三三三	(四、五〇〇)	(七、一三〇)			
洋麻	三、一〇五			一〇,〇〇〇	(六、〇〇〇)	(九、六〇五)			
黄麻			三、四三三	一〇,〇〇〇	(一〇,〇〇〇)	(四,四三三)	三三三		
マニラ麻								二七四、八三三	二、九三、〇〇〇

(備考) 日本内地——第十六次農林省統計表。朝鮮——朝鮮總督府、昭和十三年農業統計。臺灣——臺灣總督府、臺灣農業年報、昭和十四年版。滿洲國——滿洲國産業部農務司調、滿鐵調査部、滿洲經濟統計年報、昭和十二・十三年所載のもの、但し洋麻、黄麻のみは、次掲、皆川順稿によるもので何れも昭和十五年の推定。支那——皆川順、麻類資源と綿業、紡聯月報、昭和十六年三月による、但し出廻高を基準とするもの。括弧内が總生産高。佛印以下——International Yearbook of Agricultural Statistics 1939-40。原表に單位の異なるものは、何れも斤に換算。なほ空欄のうちにも多少産額あるものもあるが數量不詳。

問題として残るのは、やはり黄麻に外ならない。

この黄麻については、日本の需要も問題ではあるが、更に問題なのは、むしろ、滿洲、支那、或ひは南方諸地域に於ける需要である。これらの地域では、原料としての黄麻の需要は少いが、その製品たる麻布(カンニー布)、

第二表 日本麻類及び同製品輸入高

種別	昭和十年		昭和十一年	
	數量(千斤)	價額(千圓)	數量(千斤)	價額(千圓)
亞麻	五一三	一五一	二四二	二八
苧麻	一八、七二三	五、九八七	二二、七〇八	五、四八一
大麻	四、三八一	五五二	三、一五八	三四〇
黃麻	三三、九九七	五、一二一	四七、一五六	七、七四五
マニラ麻	一一五、七九一	一二、八五七	一一四、一三四	二〇、〇一七
麻織物 (内、黃麻布)	× 二、六一五 × (二、一三三)	八一八 (三七二)	× 九九六 × (五八〇)	五一〇 (二〇三)
ガンニ一袋	四、六六八	一、〇八七	三、三三七	六八七
合計	—	二六、五七三	—	三四、八〇八

(備考) 大藏省、外國貿易月表、×印麻織物のみは單位千方碼。

麻袋(ガンニ一袋)、特に麻袋の需要は多量に上つてゐるのである。例へば滿洲國(關東州をも含む)の輸入は、昭和十一年に於いて黃麻一九八千擔(二、五九七千圓)、麻袋八一五千擔(一四、〇二五千圓)、また支那のそれは、同じ年度に、黃麻一〇・六千越(二、九五八千圓)、麻袋一二・九千越(三、四八九千圓)をそれ〴〵示して居り、その他の地域に於ける輸入については、次に述べるところから知られる通りである。

(3) 今日、代表的な不足纖維原料の一つであるこの黃麻は、既に指摘したやうに、印度の殆んど獨占的な産物

南方纖維原料の生産について

第二卷 二八九 第一號 二八九

である。それは、棉花や大麻のやうに耐久力はないが、大量的に而かも廉價で生産されるところに大きな強味を有つてゐる。印度では、生産高のうち極く一部分は自家用に用ひられるが、通常、大體半分以上は國內で製織用に充てられ（これがまた輸出される）、その他が輸出される。印度の貿易統計によれば、黄麻及び同製品の輸出は、價額（一九三七—三八年、四三四、九六六千留比）から見ても、大體、原料たる黄麻、麻布、麻袋（この外、カンバス、絲類、網索等があるが少量である）に三分されてゐる。そしてこれらのうち、東亞諸地域に向けられるものについて言へば、先きにもふれたやうに、原料たる黄麻は極めて少く、製品を主としてゐるが、なかでも壓倒的部分を占めてゐるのは麻袋である。その麻袋の東亞向け輸出は、一九三七—三八年度に於いて、次表の如き状態を示してゐる。

第三表
印度の東亞向け麻袋輸出（1937—38）

地域別	數量 (千個)	價額 (千留比)
緬甸	50,882	10,473
英領馬來	5,047	1,270
英領ボルネオ	55	8
香港	12,394	2,664
印度	41,072	9,781
泰國	12,849	2,901
佛印	28,849	4,962
比律賓	6,627	1,027
日支那	9,190	2,110
小計	37,025	8,130
噸換算(噸)	205,676	43,327
濠太刺利	66,902	16,603
パプア領	1,686	359
新西蘭	14,021	3,121
フィジー諸島	282	61
小計	81,205	20,145
噸換算(噸)	76,009	—
合計(噸)	263,056	63,472
麻 布		
緬甸より支那 までの小計(噸)	15,767	6,501
濠太刺利 外3地(噸)	9,575	4,532
合計(噸)	25,342	11,033
總計(噸)	288,398	74,505

(備考) Annual Statement of the Sea-Borne Trade of British India, 1937-38 による。但し噸數は各輸出總計に於いてしか示されて居らず、上記の噸數は上掲各地域向け個數(麻袋)或ひは噸數(麻袋)合計の全輸出量に占める割合を求め、これを輸出總噸數に乗じて算出せるものである。

麻布についても、合計だけを表の下欄に示してあるが、麻布、麻袋兩者の數量について見れば、緬甸以下支那

- 4) Lippincott, I., Economic Resources and Industries of the World, 1929, p. 397.
- 5) Imperial Economic Committee, ibid., p. 74.

までの合計で約二〇三千噸となり、これに濠太刺利及び新西蘭等を加へれば、合計約二八八千噸に達する。これは、需要の推定に對する單に一つの基礎たるものに過ぎないであらうが、何れにしても、東亞諸域地に於いて相當多量の黄麻製品、従つてまた黄麻を要することは明かである。

(4) このやうな需要に對しては、共榮圈内に於ける黄麻の生産(前掲表参照)はあまりにも少い。それは、今日日滿支に若干生産されてゐるが、そこに更に多く求めることは困難であり、従つてこの場合にも亦、南方諸地域のうちに適地を見出さなければならぬのである。

黄麻の生産に必要な自然的基礎は、高温、多雨、多濕にして一定期間の乾燥期のあること並びに土壤が肥沃であること等である。従來、印度以外に於ける黄麻栽培の試みは、あまり成功してゐないが、然し、かゝる諸條件を有つ地域を——それが充分理想的なものでないにしても——南方諸地域に求めることは必ずしも困難ではないやうである。泰國の一論者は『印度以外の多くの他の熱帯圏に於て袋を作る爲め黄麻纖維を生産する種々の試みが爲されたが、その多くは土壤及び氣候が可成良好なのに、勞銀が頗る高いので到底斯業の收支が償はなかつた』⁶⁾と述べてゐる。黄麻の生産には、一定の自然的條件の外に多くの勞働力を必要とすると言はれるが、こゝに勞働力の問題が指摘されてゐるのは注意さるべきであらう。

南方諸地域のうち、黄麻を栽培しうる自然的基礎を有つ地域として認められてゐる一つは泰國である。⁸⁾前掲の表には示されてゐないけれども、こゝでは既に古くから黄麻が栽培されてゐたと言はれ、現にまた、少量のものに過ぎないやうではあるが(前掲の泰國統計年鑑にも黄麻については記されてゐない)、それが生産されてゐる。最近の試験の結果によれば、印度産に匹敵するものも存在すると言ふ。更に、當局者によつて若干の地方が検討され、

6) Lippincott, I., *ibid.*, p. 397.

7) ナイ・アリヤント・マクニン, 前掲邦譯, p. 28.

8) 東亞經濟調査局, 前掲, シヤム篇, p. 260.

黄麻栽培に適當な地域の存在することも指摘されてゐる。⁹⁾ それにも拘らず、今日、黄麻生産には見るべきもの少く、米の包装に必要な麻袋は、これを輸入に依存してゐる状態である。

このやうな黄麻生産の未發達の原因については、一つには、その研究が不充分であつたやうにも見られて居るが、更に黄麻の開花期に必要な熟練労働を缺くことが、この難點とされてゐることは注意を要しよう。而かもこの労働力に關する點は、今も解決されて居らず、従つて泰國では當分黄麻生産の發展する見込みはないとする見方も存在する。¹⁰⁾ 然し、これらの事情の外、この黄麻生産の未發達なことについても、棉花の場合に見たと同じやうに、そこに英吉利の制肘が働いてゐたのではないか。泰國に於ける黄麻生産の發達は、言ふまでもなく、印度のそれと對立するものであるから。

泰國の黄麻生産については、右の如く、労働力の點に難點があるとすれば、さうした事實は、たしかに注意されねばならない。然しそこには、黄麻生産に適當な自然的基礎の存在することが認められてゐるのであり、従つて黄麻生産の候補地として更に検討すべきであらう。

黄麻の生産は、佛印に於いても可能である。ローマの國際農業統計年鑑によれば、佛印は、南方諸地域のうち——印度、ネパール等を除けば——黄麻の生産が示されてゐる唯一の國である。然し、その佛印に於いても、現在、黄麻の生産高は極めて少量であり(前掲表参照)、栽培面積も二百陌(一九三七年——佛印統計年鑑)を示すに過ぎない。その栽培は大部分東京及び安南で行はれてゐるが、現在では栽培地も限られて居るし、作物としても、米や玉蜀黍と間作されてゐて、重要なものとしては取扱はれてゐない。これは、一つには、他の競争作物との關係が

9) ナイ・アリヤント・マクニン、前掲邦譯、pp. 27—30.

10) 東亞經濟調査局、前掲、シヤム篇、p. 260.

ら、黄麻の栽培は必ずしも有利でなく、また農民としては貯蔵の設備を欠き、或ひは取引機構の不備などによるところが少なくないとされてゐる。生産された黄麻は大部分地方消費に充てられ、輸出も若干存在するが少量に過ぎない。そしてこゝでも、麻袋は輸入に依存してゐるのである。¹¹⁾

然し、現状はこのやうな状態ではあるが、佛印に於ける黄麻栽培の可能性は認められてゐる。現に邦人の手で試作も行はれ、好結果をえてゐる場所もあると言ふ。¹²⁾ 然し我國では、從來必ずしも充分調査がなされてゐないやうであり、更に各種の條件について具體的に明かにされねばならないであらう。

更に、蘭印も一つの候補地としてあげられるだらう。然し現在では、こゝではカボック（これは廣く知られてゐる著名な蘭印の特産物である）或ひは種々の硬質繊維（一九三九年四三千噸、但し「購入」？）を含む——蘭印統計書、これは主としてシダル麻、カンタラ麻¹³⁾）は可なり生産されてゐるが、黄麻については生産量も明かでない（蘭印統計書）。

恐らくそれは少量に過ぎないのであらう。けれども、現に、我が南洋興發會社は、例へばニューギニアで黄麻の栽培に成功してゐる。當社では、こゝではじめ棉花の栽培を行ひ、これも一應成功を見たが（前述）、黄麻の栽培は棉花以上の成績を示してゐると言はれ、現在、それは印度黄麻の不足を補ふために栽培されてゐる。¹⁴⁾

これらの外、更に適地を見出すことも不可能でないであらうし、例へば緬甸の如きも問題とされてゐる。

(5) 然し、以上の諸地域に黄麻の生産が可能であるとしても、近き將來、その充分なる自給を計ることは、この場合にも困難であらう。従つてその對策を必要とするが、現に問題にされてゐるのは、黄麻代用品としての他の麻類の増産である。そしてこれには、ケナフ、苧麻などが取り上げられてゐる。この種の麻類は、日滿支で産生されてゐるので今後或る程度増産も可能であり、現に滿洲國では印度よりの麻袋の杜絶に懼み、その代用原料としてケナフの増産を促進せしめてゐる。たゞその多量の増産は急

- 11) 箸尾恭之助、佛領印度支那に於ける雜纖維。紡聯月報。昭和16年11月、pp. 18—19。
12) 大東亞共榮圈確立の具體的構想。東洋經濟新報(伊藤兆司教授)、昭和17年2月28日、p. 26、南方資源對策を語る、前掲誌、p. 22。

速には望み得ず、これを以つて黄麻の需要をみたすことは依然容易ではない。商麻も黄麻の代用品ではあるが、これは纖維が弱く、麻袋には不適當とも言はれてゐる。何れにしても、黄麻代用品の増産対策も、このやうに一應問題にされてはゐるが、これに多くを望み得ないとするならば、南方諸地域に黄麻栽培の適地を求めることは益々必要となつて來るであらう。

麻類の利用に關し、今日、更に重要な課題となつてゐるのは、所謂その綿紡化或ひは短纖維化の問題である。これは、麻を短纖維となし、それを、單一に或ひは他の紡纖維、即ち、棉花、羊毛、ス・フなどと混紡し、以つてこれらの纖維原料の不足を補はんとするものである。専門家の研究によれば、この單纖維化のためには、それに最も困難の多い商麻をはじめ、大麻、黄麻、苧麻、亞麻等何れも利用することが出来る。然し、この問題は今日まだ研究時代の段階にある。既にその工業化の計畫も若干目論まれてはゐるが、それには、技術的な點に於いては今後の研究に俟たねばならぬところが少なくないと共に、また經濟的（例へば生産費の問題）にも難點が見出される。或ひはまた今日では、利用し得る麻類は量的にも限定されてゐる。このやうに問題は殘されてはゐるが、然しこの麻類短纖維化の問題は、纖維原料対策の重要な一部をなすものであり、その達成こそまた當面の緊急な一課題たるものである。

〔附記〕 以上の外パルプ用原材料の問題にも及ぶ豫定であつたが、紙幅の都合上省略せざるを得なかつた。

五 五 五 五 五

今日、東亞に於いて南方諸地域の有つ纖維原料の補給能力、その若干の見透し、並びにその基盤をなす自然的基礎の如何等は、大體以上に見る通りである。そこに粗雑ながら明かにしえたところは、これらの南方諸地域のうちには、各種の纖維原料生産に好適な或ひは可能な自然的基礎を有つ地域は必ずしも少くなく、然しそれにも拘らず、それらは殆んど未開發のまゝに放置されてゐることである。然し既にかゝる自然的基礎の與へられてゐることは、そこに纖維原料生産の可能性のあることを示すものであり、従つてまた、これらの南方諸地域に於い

13) 緒方正、前掲書、p. 665.

14) 南方資源對策を語る、前掲誌、p. 21.

15) 東亞經濟懇談會、前掲書、p. 136, p. 162.

16) 大貫吉之助、麻の研究と麻資源の將來（纖維研究と纖維國策、昭和15年、

て、今日東亞に於いて不足せる纖維原料の補給を計ることも可能である。そこでは、むしろ開發の歛が待たれてゐる。

たゞこれらの點に關する具體的な事實について、私の吟味しえたところは極めて不充分であり、而かも、單に若干の現象的な事實を蒐集しえたに過ぎない。むしろ、そこには多くの問題が残されてゐる。殊に自然的基礎は一應與へられてゐるにしても、それが現實に開發され、各種の纖維原料を利用しうるに至るには、言ふまでもなく、他方に於ける社會的・經濟的諸條件に俟たねばならぬ。そして、これらの點こそまた重要な問題でなければならぬ。

今や、會つての植民地支配による制約條件は排除され、南方纖維原料の生産は、全く新たな時期を迎へてゐる。而かもそこで、各種纖維原料の補給を計ることが、今日強く要求されてゐる。然しまた、そこには種々の困難が存在することも見逃しえない。たゞこれらの諸地域に於ける所要の諸條件に關する更に一層の基本的調査と、それに基づく具體的な計畫の強力な實行こそが、やがて、南方纖維原料の有つ補給能力を、充分發揮せしめうることとなるであらう。